



岩家製造株式会社のロゴが印字された大型コンテナ車が、日差しの厳しく騒がしい新宿を切り裂くように疾走していた。

窓のない仄暗い荷台の中、微かに響くエンジンの駆動音と、一定のリズムで伝わるタイヤの振動だけが空間を支配する。

「…そういえばこのタイミングで悪いけど、日野君に頼まれていた烏藤警部補について調べたわよ。」

「本当ですか!? えっと…どうでした?」

「警視庁の人事データに、ハッキングしたのだけれど、電腦犯罪捜査課…電捜課は通称ね。」

正式には、警備局局付公安別室…まァデジモンの存在なんて公に出来る訳ないしそうよね。

間違いなく彼女は警察の人間よ。」

「なら、協力してって頼むべきじゃないと?」

「そうだよ〜ワタシも痛いものなごめんだよ〜。」

「…警察の人間だからよ。」

沈黙を破った鬼塚秋子の声は、冷たく、そして重かった。

闇の中で腕を組み、向かいに座る日野勇太へと、探るような、それでいて射抜くような鋭い視線を向ける。

「天使達の息が、すでに彼女の所属する組織の中枢にまでかかっている可能性は、否定できないわ。」

勇太が現実世界へと帰還した直後、彼女と一切の接触を持つことができなかった不自然な空白の時間。

それは偶然ではなく、すみれ自身がすでに教団側の監視下、あるいは制御下に置かれていたからではないのか。

秋子が投げかけた疑念の刃に、勇太は思わず吠えた。

「すみれさんは…そんな人じゃありませんよ…!」

絞り出すように発した反論は、語尾が弱々しく震え、勇太自身の心に巣食う確信の無さを隠しきれていない。

大人が子供を騙すことなど、この狂った世界では容易い。

「ごめんなさい。あなたの見る目を疑うわけじゃないの…。」

揺れる車内で、秋子は勇太の真っ直ぐな視線に耐え切れず目線を離れた。

静かに息を吐き出し、謝罪した。

「配置された駒の背後を疑うのは、大人の悪い癖ね。」

でも、光を救うためよ。わずかでも障害になり得る不確定要素は、今のうちに警戒し、排除しておきたいの。」

その言葉は、鉛のように重く勇太の胃の腑に落ちた。

反論できない事実。光を助けたいという想いは同じだ。

勇太は膝の上で固く握りしめた拳に視線を落とす。

彼の手の中では、ヒビ割れ、ポロボロになった『D-3』が、まるで持ち主の不安に呼応するように微かに明滅していた。



TEZ 教団本部。地上 180 メートルに位置する最上階の部屋。
豪華なステンドグラスから差し込む眩しい日光が、セラフィモンの『人間としての顔』を白く不気味に照らす。
完璧なまでに整ったその貌には、慈愛も怒りも存在しない。
ただ、這い寄るような生理的嫌悪感を催させる、
無機質で酷薄な笑みだけが、そこに張り付いていた。
「…ゆ…、最近確保した人間にまで、あのリングを装着させるとは、そこまでする必要が、本当にあったというのか？」
背後の暗がりから、ルクスモンが静かに不満を漏らす。
その顔は自身の胸の奥底で悍ましい罪悪感となって渦巻いているのが見受けられた。
「此の如き種類の羊車・鹿車・牛車、今、門外に在り。
もって遊戯すべし。汝等、この火宅より宜しく速やかに出で来たれ。
汝の欲する所に随って、皆まさに汝に与うべし…。…つまりそういう事だよ。」
穏やかで、しかし絶対的な冷酷さを持って言い放つ。
「仕方のなかった事だと…。」
「デジタマのアプリを端末にインストールしていない、いわば無垢なる人間たちを、
新型のリングだけで一斉に洗脳し、統率できるか。これは絶好の実験機会です。」
悪びれる様子など微塵もない。彼の目には、人間は単なるデータ、あるいは実験動物の群れとしか映っていない。
その時、遠く下層からくぐもった爆発音が響いた。
床を微かに震わせるその振動に、セラフィモンの瞳が、歓喜を見出した爬虫類のように細まり、闇を見据える。



爆炎が教団施設の警備システムを一時的に麻痺させた隙を突き、烏藤すみれ達は、TEZの地下深くへと潜行を開始していた。

光学迷彩と最新鋭のジャミング装置で監視網を完全に欺き、無機質で冷たいコンクリートの通路を音もなく進んでいく。

「すごいわね…これ。」

「ふふふ…おっさん達の存在をセクハラにした甲斐はあったものね。」

冷徹なまでに最適化された、警察の特殊部隊顔負けの動き。

地下牢獄の前に立ち塞がっていた数体のエンジェモンたちを、消音銃による頭部への正確な射撃と、洗練された近接格闘で、声を発する間すら与えずに次々と物理的に排除していく。

血を流さず、データとして四散していく天使たちを冷たく跨ぎ、彼女は重厚な隔壁の電子ロックを強制解除し、内部へと侵入した。

「無事だった!? シンドゥーラモン!」

暗い独房の中で拘束されていた相棒の姿に、すみれは駆け寄る。

「う…ん?すみれちゃ…ちょっと!その胸元が開きすぎたライダーズーツ?退魔忍!?は何よ!?

あんた嫁入り前にこんな恰好?おばちゃん恥ずかしいわ!!!??」

再会を喜ぶ暇もなく、いつものように小言を放つシンドゥーラモン。

だが、その拘束を解き放った瞬間、すみれは息を呑んだ。

シンドゥーラモンの首の根元に、異変が起きていた。

金属の光沢を放つ、半円状の歪なリング。

『コンセクレーションリング』の半分が、デジモンの肉体に食い込むように生成されている。

そして同時に、パートナーとリンクしているすみれの側にも、自身の首元に同じような冷たい感触と重みが生まれていることに、彼女は戦慄した。

呪いが、ゆっくりと己を侵食し始めている。

「え、うそ!?マジか!?!」

他の仲間たちも自分の首元とパートナーデジモンの首元を見て驚いていた。

「パートナーとデジモンはデジヴァイスを通じてリンクすると言うが…その応用でしょうか?」

「安所さんの話なら、外せるけどこの場ですぐって訳にはいかないっすよね。」

「精神への影響等は、私も彼らもなさそうですね。」

「こんな状況にならないと確認できないのが嫌らしいっすね。」

「…すみれちゃん…最上階のセラフィモンを急いで抑えるぞ。」

「さっきの爆発音も気になります。」

セラフィモンの確保、日野君の家族みたいに連れて来られた人間の保護、爆発元の確認の3班に分かれて行きましょう。」

「[了解]」

恐怖を無理やり奥歯で噛み殺し、すみれは銃を構え直した。



一方その頃、地上階の第1礼拝堂。
そこには無数の信者たちが集い、異常なまでの静寂の中で、一切の表情を消したまま、
虚空に向けて祈りを捧げていた。

「主よ、我らを導き給え…」

その不気味な静寂を、耳を劈くような轟音が唐突に引き裂く。

岩家製造株式会社の工場長が違法ルートで調達してきた、
対戦車用の重バズーカ砲が外壁で火を噴いたのだ。

凄まじい爆発と共に第2礼拝堂の厚い壁が跡形もなく吹き飛び、粉塵と炎が渦巻く。

その圧倒的な破壊音に、教団内に配備された
警備デジモンたちの意識とリソースが、一斉にそちらへ集束する。

完璧な陽動。警備システムに生じた数秒の情報の空白地帯。

その僅かな隙を縫うようにして、遠く離れた第3礼拝堂の高い位置にある突上窓を、
勇太たちが外から蹴り破った。

鋭い破碎音と共に、ガラスの雨が月光を反射して降り注ぐ中、秋子が、スーツの
能力を音を殺して冷たい大理石の床へと着地する。

勇太は、茜を抱えながら降りる。

「委員長…大丈夫?なんか…こう静か?」

「だ…大丈夫やけん…!いつまで抱いとると、セクハラばい…!」

そう言うと茜は勇太の腕から起きた。

「奥様のとこのティマーさん可愛らしいわね。」

「ね～、ぷぷ。」

秋子とエレプモンがからかい半分に後ろで茶化する。

息を潜め、互いに目配せを交わすと、彼らは教団の深部、
暗く口を開ける廊下の奥へと、確実な歩みを進めていった。



「…おや、来たようだね、誠司君、琴音君。

侵入者は任せたよ。」

背後の暗闇から2人…3人、4人の姿が現れる。

「俺じゃなくて…お仲間のデジモンでいいんじゃないですか？」

「いいじゃないですか～こうやって好きな事できるのはセラフィモン様のお陰ですよ～？」

ダルそうな中年の男と軽そうな口を紡ぐ少女…それに付きそうかたちで同年代と見受けられる男が現れる。

少女はその男の顎を愛おしそうに撫でる。

「おい…おとおお俺は…!あのガキがきき来てるんだろ!？」

おとおお俺に殺させろ。」

「げっ、いたッスカ…。」

「ああ!？」

「待ちたまえ、君のパートナーデジモンは大きすぎる。

君の怒りは十分に理解しているが、今は彼らに任せるのが最善の選択だよ。

それに、すぐに出番があるさ。」

「…俺は、代わってもいいんですがね。」

宥められた直人は、壁を殴りつけ、渋々舌打ちをして引き下がる。

部屋の中に、生理的な嫌悪感を催す泥のような空気が淀んだ。

2人を見送った後、セラフィモンは誰にも聞こえるわけでもなく呟いた。

「お前が選んだ勇太君か、それとも哀れな迷える子羊のすみれ君か。

彼らがどのような絶望の表情を見せてくれるのか…楽しみだ。

ケルビモン、これがお前の選んだ事のツケだ。」



一方、エレブモンの高度なハッキング能力を駆使し、監視カメラの視覚情報を次々と書き換えながら隠密裏に進む勇太。だが、薄暗い大廊下の中程に差し掛かった時、突如として、粘りつくような圧倒的な殺気が彼らの前を塞いだ。「…パパぁ。本当にいたよ…あの子たち殺すのお?」その無垢な笑顔が、逆に背筋を凍らせる。闇の中から、幼児のように無邪気で、狂気に満ちた声が響く。(バレた!?…なんで?…あのパートナーデジモン、エリザモンか。)

「下品な言葉遣いをするな、セラフィモンは殺しの前提で行ってるんだろうが、追っ払うだけだ。仕事ではあるが、人間、デジモン。なんであれ生き物を積極的に殺す奴は墜ちてくぞ。特に子供なんかはな。それになんとも言うが俺は父親ではない。」

「はい…マスター。」

エリザモンの背後から、気怠そうな雰囲気漂わせた中年の男、篠原 誠司で姿を現す。さらにその横では、黒いパーカーを被った安藤 琴音が鉄パイプを引きずりながら、茜の姿を、まるで獲物を品定めするようなねっとりとした目で見つめていた。「あはっ…可愛い〜ねえ、そこの女の子、私の友達にならない?…これナンパかなエリちゃん?誠司さん?」「ナンパって?」「集中しろ安藤、エリザモン…お前が日野 勇太だな。」

安藤が冷たい瞳で勇太を見た。(当たり前だけど、こっちの情報筒抜けだな。)

「だったら」

(あのエリザモン、本当につて。恐らく監視カメラに映ったとかじゃないな…究極体の感ってやつでバレたか?)

「日野…帰れ。」と促した。だが、勇太がその言葉に従うはずもない。「はぁ!?人の家族誘拐しといて何言ってんだよおっさん!分かってんだろ!邪魔すんなら殺すぞ…!」

勇太の確固たる決意を聞き、誠司は深く、ひどく疲れた溜息を吐いた。「ひとつ覚えておけ、ガキ。大人は社会的責任からお前達(クソガキ)にも優しくしてるだけで、本当は舐めてるクソガキは、ぶん殴りたくてしょうがないだつてな!」

手にしたデジヴァイス iC から、どす黒い光が噴き出す。「はっ!馬鹿なおっさんは主語がでけえな!そんなんだから舐められるんだよ!おっさん!!!」

勇太も D-3 を掲げフェアリモンの脚を形成する。エリザモン、進化(わからせ)だ。」

「う…うんマスター。」

誠司の冷徹な声と共に、凄まじい光が大廊下を包み込んだ。粘つくような悍ましい殺気が膨張し、光の中から巨大な水の怪物、シードラモンが姿を現す。(秋子さん。)

(ひとりでやるつもり?馬鹿言うんじゃないわよ。)

(状況が変わりました、時間が経てばで異変に気付いた、信者、デジモンがここに向かってきます。信者のいる第1礼拝堂、爆破した第2礼拝堂はあいつ、らのいる廊下からしか来れない。あの男とシードラモン…直感ですがあのお姉さんより強いです。注意はこっちに向けて、俺は、一気に駆け上がります。留まって囲まれたら成長期のエレブモンとこのスーツだけなら抑えきれない…!工場の皆さんと合流しつつ、逃げながら可能な限り他の目を引き付けてください。)

(…)

(ちょっと日野君!)

「分かったわ…茜ちゃん、この状況を見て…いいわね?」

茜は静かにうなずいた。



「可愛い…ねえ～私の友達にならないっスか？」

琴音の狂気に満ちた声と共に、彼女の足元の影が不気味に脈動を始めた。真っ黒なタールのような物質が這い上がり、マフラー状に変形して彼女の首元に巻きつく。

それは、シェイドモン。

それは琴音の影の中で蠢きながら、茜を舐め回すように見た。

「何ば言いよると……？」

得体の知れない気配に茜が後ずさるが、琴音は一方的に狂気じみた言葉を紡ぐ。

「ちょっと、怖がってるでしょ黙ってなさいよ！」

制止する秋子に対し、琴音は小首を傾げて無邪気に笑った。

「オバサンは邪魔しないでっス今、お話してるの！」

「…オバ…!!!?まだ32よ!!!」

「オバンじゃん!!!」

「ぶっ飛ばすわよこのガキ！」

(…オバンっちゃろ。)

(…お姉さんと思っておこう。)



その怒声と同時に、シードラモンが咆哮を上げた。
巨大な尾が空気を引き裂き、天井を支える太い支柱を粉碎する。
重厚な瓦礫が、容赦なく勇太たちの頭上に降り注ぎ、強制的に彼らを分断した。
轟音と粉塵の中で、それぞれの死闘の幕が切って落とされる。
シードラモンが巨大な顎を開き、勇太へと襲い掛かる。
同時に、琴音が引きずっていた鉄パイプを軽々と振り上げ、狂った笑みを
浮かべながら茜と秋子に向かって跳躍した。



シードラモンの口から、絶対零度の水流が放たれた。
空気を凍らせる凶悪な一撃が、瓦礫ごと勇太の体を吹き飛ばし、そのまま床を破壊して階下へと彼を押し流していく。

「ぐあぁっ…！」

激しい落下の衝撃。肺から空気が搾り出される。

勇太が叩きつけられたのは、階下に広がる第1礼拝堂の中央、無数の信者たちが祈りを捧げるその足元だった。

「ッチ、こんなとこまで一気に…！」

天井が大きく崩落し、水と瓦礫が滝のように降り注ぐ異常事態。

だというのに、周囲の信者たちは一切の動揺を見せない。

無表情のまま、感情の消え失せた瞳で一斉に勇太を見下ろす。

「彼を捕らえろ」

崩れた天井の縁から、誠司が冷酷な声で見下ろした。

その命令に従い、信者たちが死者のような手を勇太へ伸ばす。

「なっ…!？」

スライディングでその無機質な群れの腕を躲した勇太は、じりじりと這い寄るような狂気の光景に背筋を凍らせた。

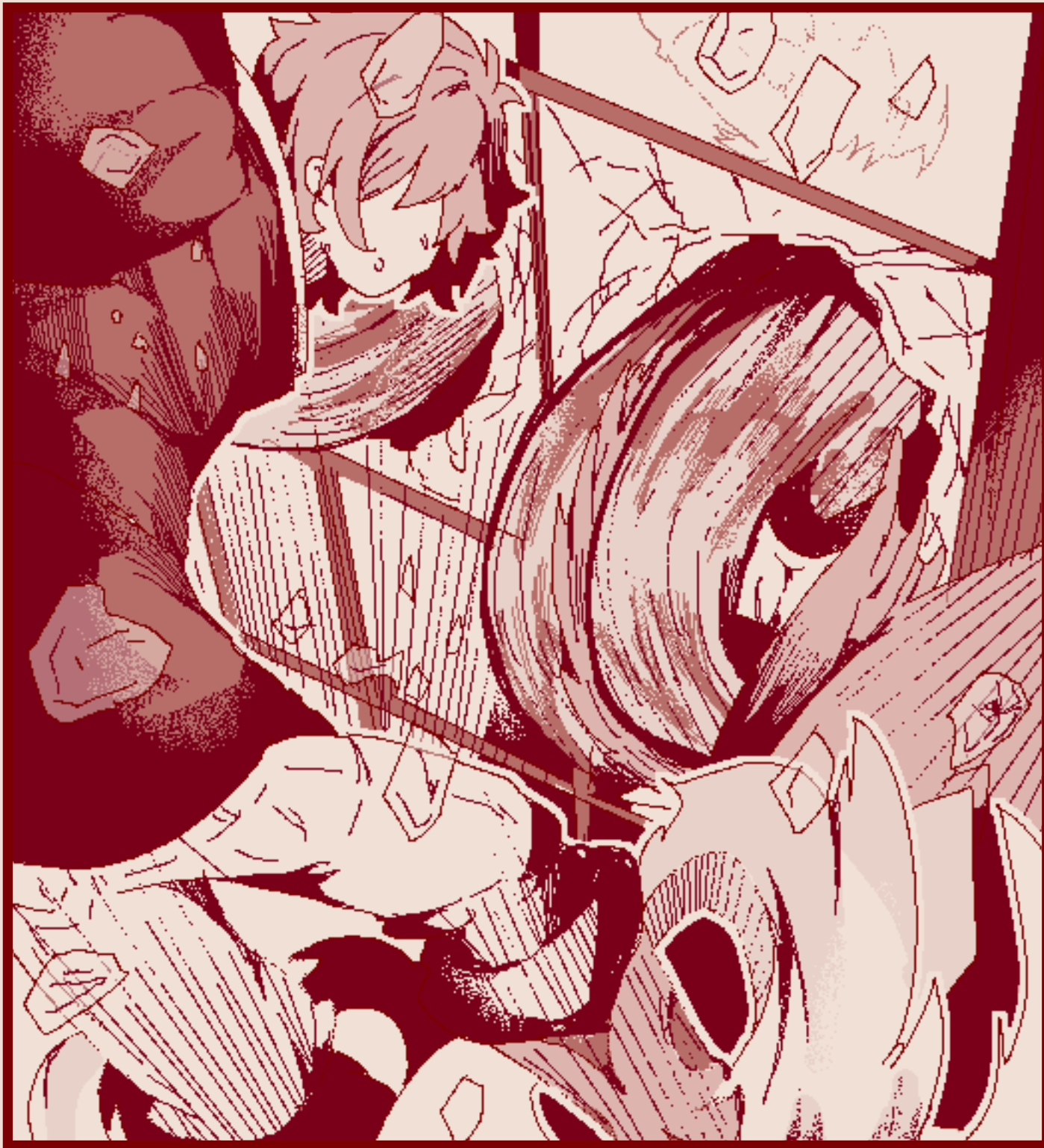
だが、シードラモンは信者たちの存在などお構いなしに、再び絶対零度の水流を溜め込み、礼拝堂ごと吹き飛ばそうとする。

「お…おい！子供もいるんだぞ!?何やってんだ巻き込む気か!!!」

勇太の悲痛な叫びに、誠司は表情一つ変えずに答えた。

「もうひとつガキのお前に教えといてやるよ。

命令であれば、残酷な事をして…人間はそんなに罪悪感はない。」



人間を人間とも思わぬ誠司の冷酷な言葉が、広大な礼拝堂に氷のように響き渡る。このままでは、無抵抗の信者たちが水流で皆殺しにされる。

勇太はヒビ割れた D-3 を握りしめ、胸の奥底で燃える風のスピリットの力を、両の脚へと一気に集中させた。

足元に巻き起こった荒れ狂うつむじ風が、勇太の身体を重力から解放し、フワリと宙へ浮かせる。

その直後、シードラモンの巨大な顎から、周囲の空気を白く凍らせる絶対零度の濁流が、轟音と共に吐き出された。

「おおおおおっ！」

勇太は風を推進力に変え、空中で身体を捻るようにして跳躍する。

直前まで彼が浮いていた空間を、巨大な水の槍が通過し、大理石の床を瞬時に凍結させ、粉々に砕き散らした。

(俺がここにいたら、下の人間が巻き込まれる…！)

勇太は一瞬で状況を判断し、シードラモンのヘイトを自分に向けたまま、礼拝堂の高い位置にある突上窓へ向かう。

「こっちだ、デカブツ！」

脚に纏った風を鋭い刃のように圧縮し、分厚い強化ガラスへ蹴りを見舞う。

鋭い破碎音と共に窓が粉々に砕け散り、勇太は夜の新宿の冷たい空の真っ只中へと飛び出した。

「逃がすか。追え、シードラモン！」

誠司の冷徹な号令に応え、巨大な水竜が咆哮を上げる。

勇太が飛び出した直後、教団本部の外壁が内側から爆発したように吹き飛び、シードラモンがその巨体を夜の闇の中へとくねらせて出現した。

吹き荒れる夜風の中、勇太は建物の垂直な外壁に足をつけ、フェアリモンの風の力で重力に逆らい、猛スピードで駆け上がる。

「シャアアアッ！」

背後からは、巨大なシードラモンが外壁のコンクリートに深々と爪を突き立て、挟りながら執拗な追撃を仕掛けてくる。

時折放たれる氷の散弾を、勇太は壁面をジグザグに駆け抜けながら、紙一重のアクロバットで躲かしていく。

氷弾が外壁に着弾するたび、クレーターのような穴が空き、砕けた破片が雨のように新宿の街へと降り注ぐ。

巨大な怪物の圧倒的な質量と、風を操る少年の機動力。

地上百メートルを超える垂直の戦場で、一瞬のミスも許されない死と隣り合わせの壁面チェイスが、果てしなく上層へと続いていく



突如、シードラモンの尾が外壁を砕き、勇太を室内へと弾き飛ばす。
硝子片と共に客室の床を転がった勇太の目に、窓の外から巨大な顎を突き入れるシードラモンの姿が映った。
喉の奥で、膨大な質量の水流が圧縮され、発射の時を待っている。

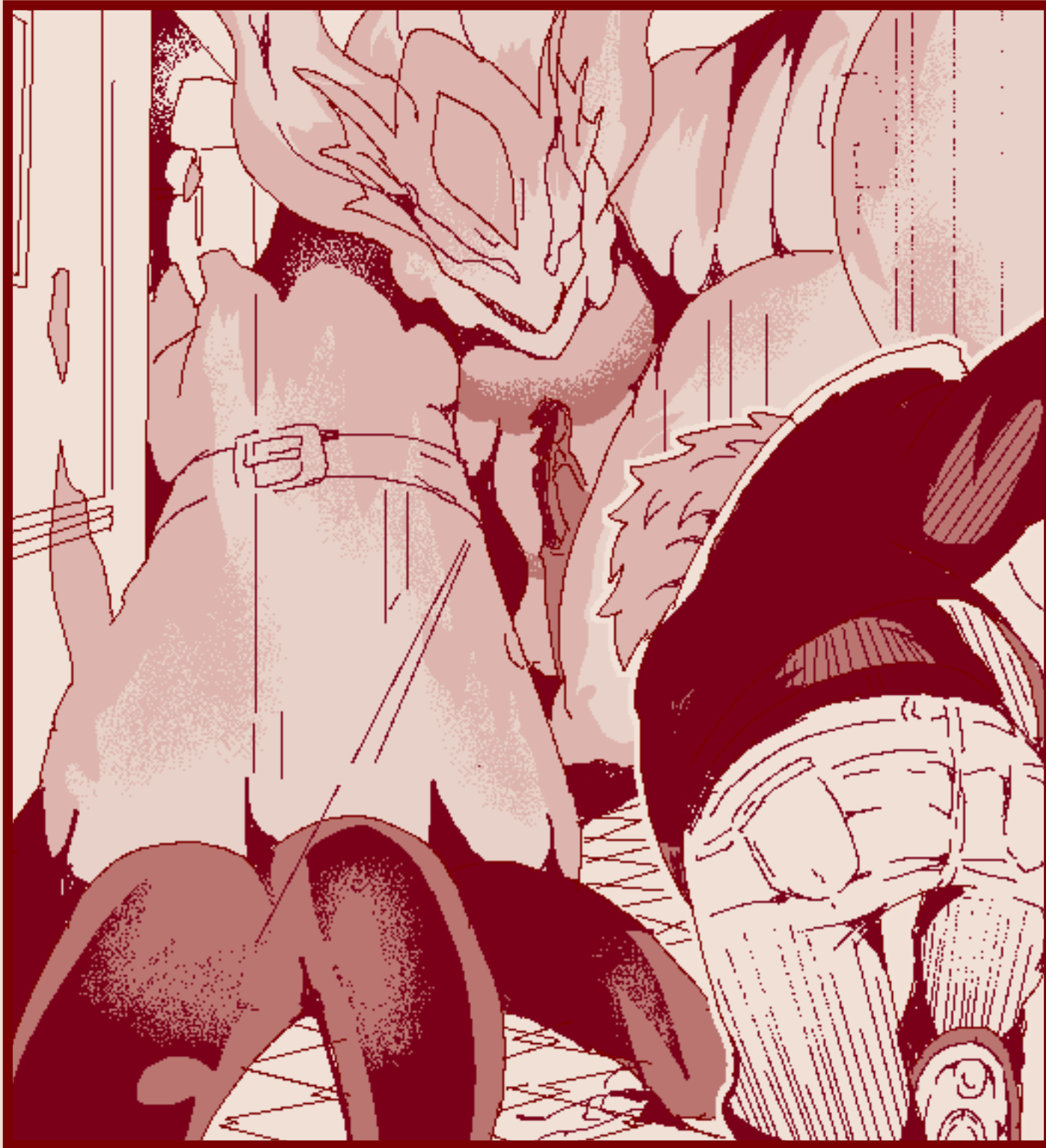
「やらせるか…！」

勇太は風を操り、室内にあった長椅子や重厚なオーク材の机を旋風に乗せ、力任せにシードラモンの顔面へ投げつけた。

凄まじい勢いで飛来した家具が、発射寸前で大きく開かれていたシードラモンの口内に深く突き刺さると、完全に顎を塞ぐ。

「્યાアアアッ！」

内部で暴発した水流が、シードラモンの嘴に深い亀裂を走らせる。
大量の水が逆流し、その衝撃波で勇太は廊下へと押し出された。



廊下を転がった勇太が顔を上げると、そこには先回りしていた誠司が、冷たい目で見下ろしていた。

「…そのくらいで帰っとけ。」

立ち上がり、殴りかかろうとする勇太の拳を、誠司はデジソウルで強化された圧倒的な体術で容易く捌き、重い蹴りを勇太の腹部に沈める。

「面倒だ、諦めろ。お前にも世界にも…救いなんてない。」

(凄まじいなこの子供、事前の情報のとおり一部だけのスピリットエヴォリューションからデジソウルの使い方を学んでるだけで、俺達みたいに体系化した強化をしていない。)

デジソウルの流れを見るに脚に集中して他はおざなりになってる…この一発で内臓を傷つけて気絶させるつもりだったのにな。

(今までの戦闘経験で鍛えられた人間の肉体としての強さか。)

胃液を吐き出しながらも、「…断る」と睨み返す勇太。

その目に篠原は目に見えて苛立ちを募らせ、舌打ちをした。

その時、外壁を這い上がってきたシードラモンが光に包まれ、さらに巨大で凶悪な体へと進化を遂げようと蠢き始めた。

限界を超えた質量に耐えきれず、廊下の天井が大きく崩落する。

「…今だ!!!」

その一瞬の隙を突き、風により周囲の温度を下げ瞬時に霧を発生させ視線を塞ぎ、勇太は風を纏って上階の抜け穴へ飛び込んだ。

「…行って、後悔するぞ」

誠司は追撃を止め、崩れゆく廊下の中で一人、静かに呟いた。



一方、下層では茜たちを執拗に追い詰める琴音がいた。

「ねえねえ茜ちゃん。」

「馴れ馴れしいんばい!!」

「あの子…日野君のこと、好きでしょ？」

私とね～同じだよ～、キヒヒ一目見て分かっちゃった。

ねえねえだからさ、私の友達になってよ。」

シェイドモンが寄生虫のように数体の天使の石像に潜り込み、不気味な軋み音を立てながら茜たちへと迫る。

秋子はパワードスーツを仕込んだライダースーツの出力で身体能力を極限まで強化し、石像の重い拳を間一髪で躲す。

エレブモンもネバナネネットを駆使し、懸命に牽制を続けていた。

琴音の背後には、虚ろな目をして人形のように立ち尽くす一人の少年。

琴音は、まるで所有物を誇示するかのよう、勇斗の腕に自分の身体をねっとり密着させる。

「茜ちゃんも、日野君のこと好きでしょ?琴音には分かるッス。だって私と同じ、恋する乙女的な?」

うふふ、と琴音は少年の肩に自分の頬をすり寄せる。

少年の瞳にはハイライトがなく、ただ自律神経の働きだけで虚ろな呼吸を繰り返している。

「琴音ね、ずっとお部屋に引きこもってたんすよ。」

いじめられて、誰も助けてくれなくて、世界は真っ黒で。

でもね、幼馴染の先輩…あ～えっと、えっとこの人ッス。太田 勇斗。

でね、先輩だけは優しかった。私の光だったッス。

先輩が言ってくれたから、琴音、勇気を出して外に出たの…。」

ギリッ、と琴音の表情が、凄惨でドロドロとした嫉妬に歪む。

「先輩、他の泥棒猫みたいな女とヘラヘラ笑ってたんすよ?ひどくないッスカ!? あんなに琴音に優しくしたくせに!

だからね、天使様から貰ったシェイちゃんにお願いして、先輩の頭の中、いーっぱいじってもらったッス。」

琴音がシェイドモンを撫でると、タール状の影が嬉しそうに形を変え、勇斗の首筋へと這い上がっていく。

「そしたらね、見て?先輩、今は琴音のことだけを見つめてくれる、すっごく優しい恋人になったの!今は二人きりで、ずっと一緒に暮らしてるんすよ。」

それは狂気に満ちた愛の告白。自分の欲望を満たすために他者の尊厳を完全に踏みじり、それを無邪気に正当化する、悍ましくも純粋な悪意を自覚しない悪意であった。

「茜ちゃんも、その羊ちゃん、にお願いして、日野君の脳みそを洗脳しちゃえばいいッスよ。相手の気持ちなんて無視しちゃっても、自分のものにしちゃえば、絶対に幸せになれる的な?」

「…あんた、頭おかしんと違うか!?!」

琴音は小首を傾げて、心の底から不思議そうに笑った

悪意で茜の心を抉ろうとする琴音の言葉。

だが、その時、隔壁を吹き飛ばして何者かが乱入した。

「おうおう聞いてれば悪影響しかなさそうな勧誘してるな嬢ちゃん!そういったのはおっさんだけにしときな!」

「そこまでよ、イカれ女!」

駆けつけたのは、宗介と巨体を揺らすアルケニモン達だった。

強靱な蜘蛛の糸が蠢く石像たちを拘束し、一気に粉碎して

茜たちの窮地を救い出した。



両親が囚われているはずの部屋に、ようやく辿り着いた勇太。
だが、目的の部屋に入った瞬間に見たのは、すみれとシンドゥーラモンだった。
勇太は、すみれとシンドゥーラモンにコンセクレイションリングが
半分だけ着いているのを見て、秋子の言葉が脳裏に浮かぶ。
(どっちだ…!?アレはコンセクレイションリング!?秋子さんの言った通り…でもすみ
れさんは!時間がない…さっきの男も追い駆けてくるか…!話してる時間…シンドゥ
ーラモンに勝てるか!?…駄目だ。)

一方のすみれも、奥の部屋の凄惨な状況を隠すため、
飛び込んできた勇太をこれ以上進ませるわけにはいかなかった。
(日野君…!この状況日野君の首元は見えないけど…!盗まれたデータのスーツと同
型…!今ここで戦闘になれば負傷を負う…!?セラフィモンの確保に支障が…違ったと
しても…この奥に日野君を進めさせるのは…!)

一瞬の疑心暗鬼。それが決定的な摩擦を生む。
「シンドゥーラモン、彼を戦闘不能にして!」
「…!すみれちゃん!?…いいのね!」
「ええ!!!」



完全体であるシンドウラモンの圧倒的な暴力が、逃げ場のない狭い廊下で勇太へと牙を剥いた。

「行くわよ勇太ちゃん！怪我したくなかったら寝てなさい！」

シンドウラモンが巨体を翻すと同時、鋭い電気を帯びた黄金の羽が、空気をバチバチと焦がしながら薙ぎ払われる。

「くそっ…！」

勇太は暴風を収束させ、迫り来る雷撃の軌道から間一髪で身体を逸らした。だが、完全体のスピードは人間の動体視力を容易く凌駕する。

回避したはずの死角。シンドウラモンの強烈な蹴りが、正確無比な軌道で勇太の横腹を容赦なく捉えた。

「ぐはあっ…！」

殺さない程度に手加減されているとはいえ、その一撃は人間の内臓を容易く破裂させるほどの圧倒的な質量だった。

勇太の身体はピンボールのように弾き飛ばされ、廊下の分厚い大理石の壁面へと背中から激しく叩きつけられる。

メシャツ、と肺から空気が押し出され、視界が白く明滅する。

それでも勇太は、倒れ込む前に風で体勢を立て直した。

「ぐっ！…あああああああ!!!」

風の推進力を爆発させ、弾丸のような猛烈な突進を仕掛ける。

両拳に旋風を纏わせ、シンドウラモンの胸元へ怒涛の連続打撃を文字通り叩き込んだ。

火花が散り、激しい金属音が廊下に木霊する。

しかし、その重い連撃は完全に空しく響くだけだった。

完全体の黄金の装甲には、傷一つ、凹み一つ生じていない。

「無駄よ！幾ら強化しても人間じゃ、オバチャンの装甲は抜けないわ！」

シンドウラモンが大きく羽ばたき、強烈な高圧電流を放つ。

「あぐああっ！」

青白い雷光が勇太の全身を容赦なく感電させ、神経を焼き切るような激痛と共に彼を床へと這いつくばらせた。

焦げ臭いオゾンの匂いが、閉鎖された空間に充満する。

勇太は歯を食いしばって死に物狂いで立ち上がり、再び風を纏って決死の飛び込みを見せるが、完全体と人間という、絶対的で絶望的な力の差の前に、ただ無慈悲に弾き返され、じりじりと壁際へと追い詰められていく。



「まだだ…まだだっ！」

全身の筋肉と神経が悲鳴を上げる中、勇太は最後の力を振り絞る。

フェアリモンの脚に収束させた暴風を、さらに極限まで圧縮し、幾重にも重なる高速回転の断層へと変質させた。

それは、あらゆるものを削り裂く、不可視のチェンソーの刃。

「あああああああああっ!!」

咆哮と共に床を蹴り、弾丸と化した勇太は宙を舞う。

狙うはシンドゥーラモンの顔面、装甲の隙間を突く決死の急襲。

極限まで圧縮された風の刃が、黄金の装甲に真正面から激突し、凄まじい摩擦音と共に火花と衝撃波を撒き散らした。

だが、完全体の防御力は、人間の決死の覚悟すら無慈悲に砕く。

チェンソーの如き風の刃は、装甲の表面を僅かに削っただけで

完全に弾き返され、逆にその強烈な反発力によって、勇太は紙屑のように背後の大理石の壁へと激しく叩きつけられた。



だが、硬い装甲には傷一つつけられず、逆に大きく弾き飛ばされた。
廊下の壁に激突し、激しく咳き込む勇太。
朦朧とする意識の中で冷静さを取り戻し、目の前を観察する。
すみれのリングが半分しかないこと。

「…隠して、いるの？」

そして何より、彼女が『奥の部屋を必死に隠そうとしている』こと。
様々な思考が巡り、勇太は血を吐くように一言を絞り出した。

「母さんに…会わせてください…」

その悲痛な一言に、すみれの様々な経験、考えが廻り勇太がこちら側である事を悟った。

悟ったからこそ唇を噛んだ。

「でも…見せられないわ。

あなたには、あまりにも…。」

その言葉に何かを察し、言い淀むすみれを押し分け、勇太は奥の部屋の扉を開け放った。



部屋の中には、地獄のような異様な光景が広がっていた。
勇太の両親、妹、叔母、叔父、そして茜の両親。
親族たちが皆、全裸のまま首にコンセクレイションリングを
嵌められ、無言のまま虚ろな目でこちらを見つめている。

岩家の工場での悪夢——外せない呪いの輪の記憶がフラッシュバックし、勇太は
過呼吸に陥り床に倒れ込んだ。

酸素が脳に届かず、視界がぐにやりと歪む。
「外せるんですよね…？ すみれさん、これ…。」
(分かっている…分かっているんだ…駄目だ…心臓が痛い…言わないで…クソ。)
震える声での問いに、すみれは悲痛な顔で俯くだけだった。

「母さん…父さん…」

継りつくように手を伸ばした勇太の首に、両親の無機質で冷たい手が伸び、強く
締め上げようとする。

実の親から向けられる、明確な殺意と虚無。
すみれが寸前で彼らを引き剥がすが、勇太は全てが腑に落ち、その場に膝を着き、
自分でも気付かないうちに涙を止めどなく溢れさせた。



「勇太…。」

声の方向に勇太とすみれが振り向くと廊下にルクスモンが申し訳なさそうに立っていた。

「お前…!!!」

背後に現れたルクスモンに、勇太は掴みかかった。

「家族には手を出させない約束だったはずだろ!」

「…本当に、すまない…。」

掴み上げられても深く頭を下げ、謝罪するルクスモン。

その沈痛な表情を見て、勇太は少しだけ冷静さを取り戻し、力なく手を離れた。

「信じてもらえないだろうけど。」

…君にだけは、こういった嘘を吐きたくなかった。

だが、すまない…僕もあくまで組織のデジモンだ。」

「…分かってる…そつもりだ。」

ルクスモンは唇を噛み締め、血を出しながら悔しそうに勇太に告げる。

「今、あの淫…鬼塚 光がデジタルワールドで極めて危険な状態にある。

僕の仲間が関わっているから分かる。

オフアニモン様もせん滅に関わっている。

…セラフィモン様と同格の方だ。

中途半端な結果には終わらないだろ。」

(君には、あの淫売達の情報が価値のあるもの…そうだろうね。)

その情報に、勇太は息を呑む。

その結果にルクスモンは更に苦虫を噛み潰したような顔をした

「あと、ここにはあの男がいる、気を付けな。

…僕は前にも言った通り天使側のデジモン…君にはこの位の助言しかできない。」

「あの…ちよっとま…!」

ルクスモンが「気を付けろ」と、あからさまに未練を孕んだ湿った声を残して掻き消えた、その直後だった。

鼓膜を容赦なく破壊するような、金属の悲鳴とコンクリートが爆散する凄まじい轟音が頭上から降り注ぐ。

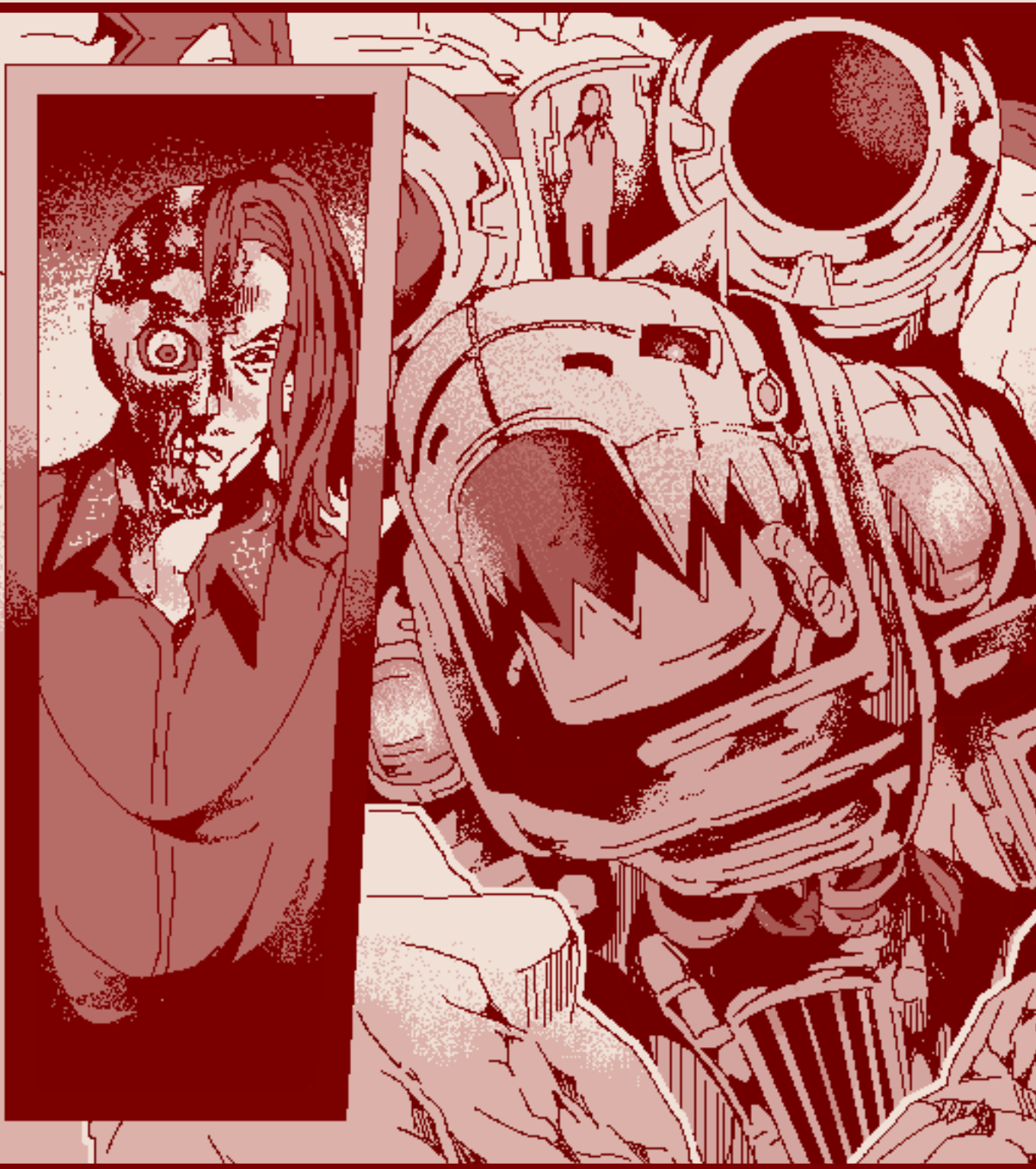
「…っ!?!」

見上げると、上の階の床が自重に耐えかねたように文字通り破裂し、そこから超重量の鋼鉄の塊が質量そのものとなって自由落下してきた。

ムゲンドラモン。その冷徹な機械の巨足の下には、まるで虫ケラのように踏み潰された大吾とダイナモンがいた。

数トンもの質量が引き起こした位置エネルギーは、勇太たちの立つ 階の床をも容易く、ガラス細工のように踏み砕く。

足場を失い、垂直の奈落へと引きずり落とされる。



四肢の周囲に巻き起こった真空の暴風が、落下速度を強制的に殺ぐ。勇太はその風の網で、全裸のまま虚空に放り出された家族たちを優しく包み込み、最下層である第1礼拝堂の冷たい床へと、傷一つ付けずにそっと着地させた。

だが、彼らが無事だったのはそこまでだった。周囲では、天井から降り注いだ数トンものコンクリート片が、逃げ遅れた無数の信者たちの上に容赦なく圧殺の雨となって降り注いでいた。生身の肉体が潰れる、ベチャリという嫌な音、内臓の弾ける生臭い匂いが、瞬時に礼拝堂の空気を満たす。

しかし、悍ましいのはその先だった、四肢を千切れ、骨を露出させた瀕死の信者たちでさえ、誰一人として悲鳴を上げないのだ。それどころか、血の海に塗れながら、表情一つ変えない無機質な瞳で、じっと勇太たちを見つめている。狂った精巧な人形の群れ。

周囲の凄惨な被害に足が竦み、動けない勇太。その生理的な嫌悪感を煽る静寂を、声が切り裂いた。

「ひひひさしぶりだなああ日野 勇太あ!!!!!!!」

「お前は……!!!」

ムゲンドラモンの上から姿を現した直人は、顔の筋肉を醜く歪め、嫉妬と怨嗟に満ちた声を上げる。

右顔は重度の火傷により爛れホラー映画のクリーチャーの様相であった。火傷の所為で口が上手く回らないのか重度の吃音と唇から泡を出している。

「なんでお前が…確かにあの時…」

「ひひひ、そうだよなあ…!!俺も死んだと思ったよお!!!」

「でもよお…けひ…神は見捨てないって言うよなあ!!!」

「俺はなあ…!えええええ選ばれたんだよ!!チメエらみてえなクソを皆殺しにするためになあ!!!」

「日野君!!!」

礼拝堂の入り口、勇太の背後から宗介に連れられた秋子と茜が声を掛けた。安藤を上手く追い払ったようであった。

「…!な…なんで!!!?」

秋子が直人に気付き激しく動揺する。

「よよおおお、ああ秋子てめえもいやがったのかケヒチメエの所為だよお!!!こんな面だよ!!!俺の女の癖してなんなんだよてめえは!!!!」

「誰が!!!」

「…日野君分かってると思うけど。」

「ええ…。」

(秋子さんに悪いけど、少し冷静になってきた…すみれさんも負傷してる。

今、優先するのは秋子さん達の安全と皆の保護…!)

(チッ、クソガキの癖して意外と冷静だな…こっちの挑発に乗りやしねえ。

他の連中もムゲンドラモンの巻き添え喰わねえように来ねえだろうし…このままだと逃げられるな。)

直人は今までの怒号ではなく恍惚した様子でその下劣な本性をいかに顔に出し、勇太にとって最も残酷な言葉を吐き捨てた。

「けひ…逃げるのかクソガキ…そうだから…その前に礼言とかねえとなあ…てめえの母親も、おめえの妹もよ…良かったぜ…」

「…何言ってる?」

「日野君…!」

「…!!!光だけじゃなくて…あんたって奴は!!!」

「けひひ秋子なら分かるよな俺がどう可愛がるか…たっぷりと可愛がって、その白色の首輪を着ける前だったからよお…最高の鳴き声だったぜ…まあガキの方は最初ろくすっぽ入らなかったが何回もやれば入るようになってよお…最期は自分で腰振ってたぜ…!」

「なあお前のお袋と妹はとんだ淫売だな!!」

「……な、にを……!!!!!!!」

あまりの悪意に勇太の脳の思考回路が焼き切れる。

怒りと混乱で、ポロボロの拳を握りしめ直人へ向かおうとする

勇太の身体を、シンドウラモンが必死に背後から羽交い絞めにする。

「ダメよ勇太ちゃん!分かってるんでしょ!!!挑発だって!!!乗ったら殺されるわ!!」

(ちっ来ねえか…まあ隙ができたな…しゃあねえいたぶれねえが一発で殺したやる。)

ムゲンドラモンの背面の双砲が、じちじちと電磁音を立てて勇太へと照準を合わせた、その瞬間だった。

(まずい!!!)



「そこまでしなさい、直人君。見苦しいよ。」

頭上の崩落跡から、一筋の清廉な光と共に、セラフィモンがその人間としての身体を優雅に滑らせ、舞い降りるように二人の間に降り立った。

その貌は神々しいまでに美しく整っている。しかし、そこから放たれる気配には、個としての感情や慈愛が決定的に欠落しており、見る者に真綿で首を絞められるような底寒い恐怖を抱かせる。

ムグンドラモンの銃口を、指先一つで制止するセラフィモン。

「チッあああんたかなんで止めるんだよ…コイツらは俺が…!」

喚き散らす直人を冷たく一瞥し、セラフィモンは教壇の上に立つかのような、どこまでも穏やかな声で告げた。

「君達暴れたお陰で自衛隊がこちらに向かって来ている。」

計画を早めようと思っただけ…丁度いいし彼らには、これから起こる素晴らしい事に参加してもらおうと思っただけ。

生贄はどんな試練にもつきものだ…主の御前での大いなる宴にならなおさらね。」

それは、デジモンによる人間たちの無差別な虐殺の合図だった。

セラフィモンは勇太を見つめ、聖職者が信徒を憐れむような

目で、その薄い唇を開く。

「君が、アンティラモンが選んだ『選ばれし子供』か。」

主は言われた、迷える子羊を導けと。ならば私は、

君の目の前で、すべての羊たちに等しく『救済』を与えよう」

セラフィモンが、まるでオーケストラの指揮者のように、その白い両腕を優雅に掲げ、信者たちに命じた。

「さあ、主を称える聖歌を歌いなさい。」

その瞬間、第1礼拝堂の空気は完全に狂気へと反転した。

瓦礫に押し潰されて下顎が完全に砕けた男が、喉を切り裂かれて血の泡を吹く女が、本来なら声を出すことすら不可能なはずの損壊した肉体をずるずると蠢かせ、地獄の底から響くような、歪んだ音程の賛美歌を紡ぎ始める。

勇太の両親や妹もまた、操り人形のように一斉に口を開閉し、その悍ましい合唱へと加わっていく。

「母さん…父さん…日花…やめてくれ!!歌うな!」

勇太の叫びは、地を震わせる合唱にかき消される。

さらに最悪なことに、崩れた天井の配線から火花が飛び散り、乾燥した礼拝堂の絨毯に火の手が回った。

瞬間に火災が広がり、歌い続ける信者たちの衣服や、剥き出しの皮膚を容赦なく焼き始める。

ジクジクと肉が焦げる嫌な音が響き、脂の臭いが立ち込める。

衣服が燃え、皮膚が焼けただれて炭化していくというのに、

信者たちは苦痛の声を上げるところか、その顔に

恍惚とした「笑顔」を張り付けたまま、聖歌を歌い続けるのだ。

「…助けなきゃ…!」

勇太が風を操り、火を消そうとするがセラフィモンが掻き消す。

「てめえ!!!」

「手癖の悪い子だ…主への生贄に手を出そうとするのは。」

「勇太ちゃん!!!落ち着くのよ!!!」

炎の壁に阻まれ、勇太は絶望に喉を掻き切るように叫んだ。

そんな彼を、セラフィモンは楽しげに、嘲笑うような目で見つめる。

「ふふ…聖書の一節にまず自分の目から梁を取り除け、そうすれば、兄弟の目から塵を取り除くことが出来るだろう。つまりそういう事だよ。」

己の無力に絶望しながら、世界が生まれ変わる様を特等席で見ているがいい。」

彼が指を鳴らすと、背後の燃え盛る壁面に、

周囲の光を吸い込むような巨大な闇のスクリーンが現れた。



巨大なスクリーンに映し出されたのは、現実世界。
それも、勇太たちにとって馴染みの深い、東京の中心、
渋谷駅前のスクランブル交差点の「いま」の光景だった。
だが、そこに広がっていたのは見慣れた雑踏などではなく、阿鼻叫喚の阿修羅場、
生々しい「捕食」の現場だった。

「助けて!」「嫌だ、来ないでくれ!」

巨大なスピーカーから、逃げ惑う人々の悲鳴が生々しく響く。

ダゴモンが触手でOLの身体を絡め取り、そのまま巨大な嘴で頭部から咀嚼していく。

レアモンのヘドロのような肉体が通行人を飲み込み、生きたまま皮膚を融解させて
いく。ギガドラモンやサイクロモン、オオクワモンといった凶悪なデジモンたちが、
ビルからビルへと飛び交い、逃げ惑う群衆を、まるで熟れた果実でも潰すかのよう
に踏み荒らし、アスファルトを瞬く間に赤黒い血の海へと変えていく。

かつての日常が、完全に崩壊していた。

混乱を極める渋谷の街。その背景にそびえ立つ、いくつかの巨大な街頭ビジョン
の映像が、一斉に切り替わった。

そこに映し出されたのは、圧倒的な威圧感を放つ魔王、デーモンの姿だった。

『我々はデジモンだ。人間どもよ、よく聞かがいい。』

我々がお前たちを殺すことに、大層な理由などない。

ただ虐殺し、喰らう。それだけだ。』

デーモンは冷酷に宣告する。さらに、その背後には奇妙なことに、自衛隊の車両
や兵士たちが、まるでデジモンたちの行動を容認するかのように佇んでいた。

『今よりランダムな地域をランダムな期間で隔離し、虐殺を行う。』

数秒で終わるかもしれないし、数年掛かるかもしれないな。

この世界は我々のものだ。天使が助けに来るなどという甘い幻想は捨てろ、…足
掻きなければ足掻かがいい…だが敢えて言おう、すべては無駄だ。』

その放送を見ていたすみれは、不自然な違和感に目を見開く。

デーモンの視線の冷たさ、言葉の端々に滲む、他者を見下すような絶対的な傲慢
さ—。

「…違う。あれはデーモンじゃないわ。」

「ええ、デーモンは確かに殺したはず…。」

違うセラフィモンの口元を見て…モニターとの動きにリンクしてる」

すべては、人々の絶望を煽るための自作自演だった。

「天使が随分とせこい真似をするね…。」

「うお!? 丁ちゃん!」

「すまない、合流に時間が掛かった。」

竜崎君は…良かった死んでないね。」

(ムゲンドラモン…まだいるね。)

少し時間を稼いでくれないか?)

(分かりました。)



映像はさらに切り替わり、今度は燃え盛る名古屋の街がスクリーンの大画面に映し出された。

アーマゲモンやアルゴモンといった究極体、完全体の超大型デジモンたちが、近代的な高層ビル群をその圧倒的な火力で徹底的に、粉塵へと変えていく。

都市そのものが巨大な火葬場と化していく中、カメラのレンズが、遙か遠方の空へと向けられた。

「なにあれ……？」

茜が恐怖に声を震わせる、名古屋の街を、そしておそらくは日本列島そのものを取り囲むようにして、天をも衝く巨大な「ガラスの壁」のような不気味な半透明の障壁が、世界を隔絶するようにそびえ立っているのが、炎の照り返しの中にハッキリと見えた。

物理的にも、情報的にも、現実世界は完全に構築された閉鎖空間の中に閉じ込められつつあった。

「何が…何がしたいんだお前はぁっ!!」

勇太の問いは、もはや血を吐くような絶望の呻きだった。

何のために、これほどの惨劇を引き起こす必要があるのか、その問いに対し、セラフィモンは、まるで至上の救済を成し遂げた聖者のように、恍惚とした表情を浮かべた。

「言ったはずだよ、すべては『より大きな善』のためだとね。」

日本中で同時に、このような無差別な殺戮を行うことで、国民の不安と恐怖は極限まで高まる。」

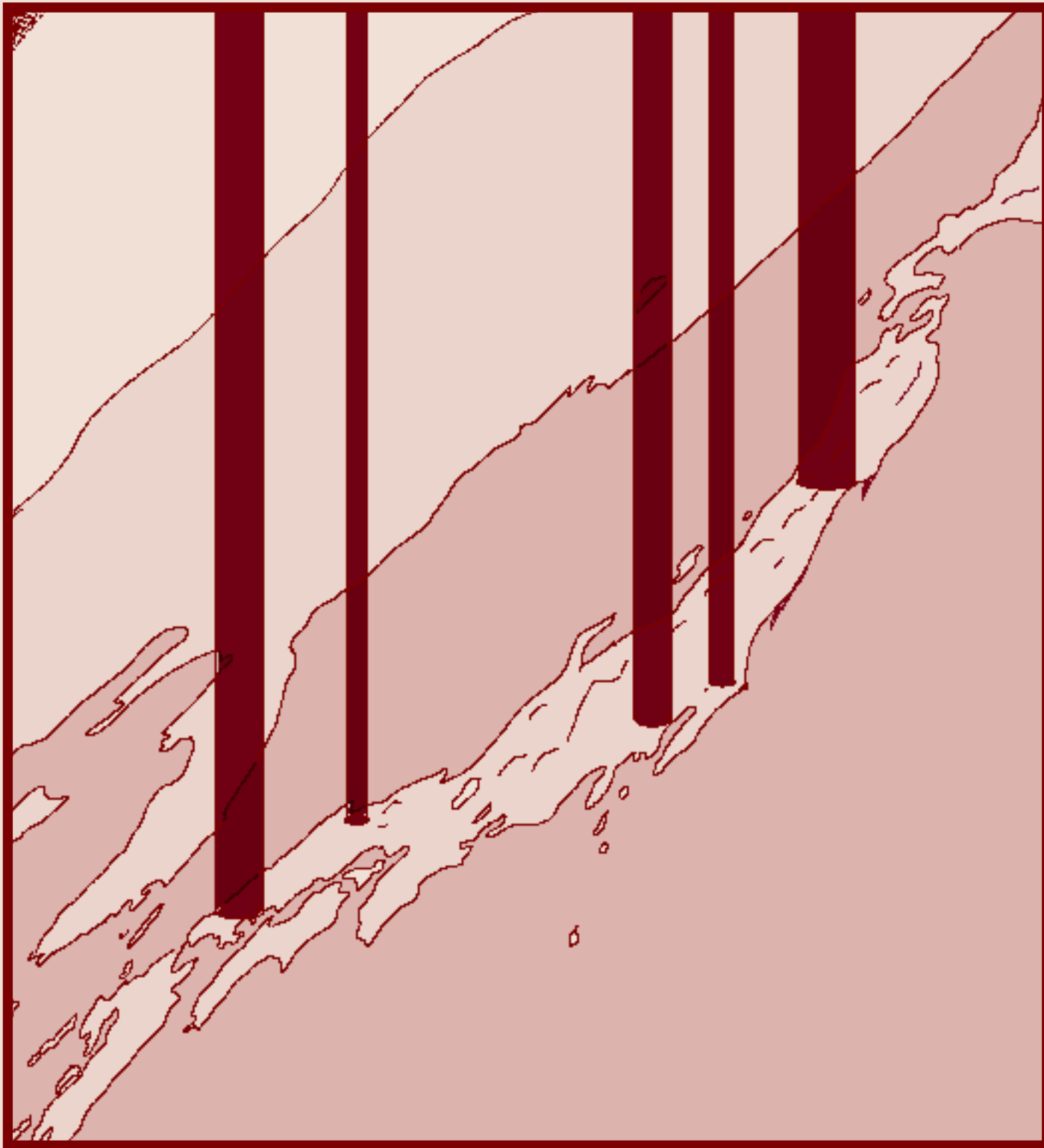
これほどの惨劇を前にすれば、人間の精神は容易く破綻する。

「精神の崩壊と恐怖のピーク…そして人間は救済を望み神に縋る…それこそが、コンセクレイションリングの発動条件を完全に満たす、最高の触媒（データ）となるのだよ。」

リングに対するテイマーの達には、日野君の家族のように、嵐区作ったリングを嵌め、内側からその精神を破壊していく訳ね。

「…随分と詳しいね烏藤警部補。」

(安所さんの情報…乗ったわね。)



「目的は何なの？ そんなことをして、何が残るといふの？」

すみれの鋭い告発のような声が、炎を切り裂いて響く、セラフィモンは、静かに首を振った。「世界の終わりについて考えて事はあるかい？…予言しようこの世界の終わりが来る。デジタルワールドもこのマテリアルワールドもすべては無に帰す。」

「…」

「だが、ひとつだけ生き残る方法がある…我々が抱える『原罪』…今こそ贖罪しなければならぬのだ。」
「クク…大層な事を言うが、なら君らのお仲間ですらどうだい？我々人間まで巻き込む必要もないだろう。」

「そうはいかないのさ…原罪…正しく我々が抱えるそれは、君達のようなアダムとイヴ…祖先が選ぶ自由すらなかった。」

インターネットが確立される以前から、人間から発せられる微弱なニューロン信号が幾つも重なり合う事で稀に電腦生物、電腦世界が発生していたんだ…。」

「思考さ…ミームと呼ぶべきか、そういった集合意識…それが重なり合った時に人々の間で極々微弱なネットワークが形成される。」

そこから形成された電腦生物、電腦世界が我々デジモンとデジタルワールドの祖だ。

そして、そのデジモンの前身となる存在は各世界の神話の怪物…あるいは…そう神として、ごく短い期間、地域ではあるが現実世界に現れた。

そして今のデジモンは、インターネットが確立されはじめて明確な存在となったのだ。

「…。」

「分かるかい？デジモンとデジタルワールドは、その発生経緯から現実世界の人間のミームに絶えず影響を受けているんだ。」

それこそ『原罪』なのだ。

我々にもその原罪が構成データの中を流れている…傲慢、強欲、暴食、肉欲、嫉妬、憤怒、怠惰…そして、それが色濃く出た者達こそケルビモンのような獣…我々はビーストと呼んでいる。

神がその原罪を裁く時がきたのだ、我々…「天使の軍勢」とて、その罪を濯がなければ地獄へと落ちるのだ。

だからこそ、全人間と全デジモンをコンセクレイションリングで管理下の元導き、一切の争いのない、完璧な『樂園』を作るんだよ。」

「あの胸糞の悪い街とこの教会みてえなもんが樂園だと…！」

彼の語る倫理には、個人の幸福など微塵も存在しない。

「ケルビモンに選ばれるような君にとってはそうなのかもしれないね。」

「けれども君達はあまりにも未熟で愚か…そして平和を望むのに利己的で争う矛盾した存在…。」

「さっきから…聞いてれば…アンティラモンの事を馬鹿にしてんのか…？」

「…」

「君たちのようなテイマーが、どれほど必死に反抗しようと、それは無駄だ。」

むしろ、君たちが希望を持って足掻けば足掻くほど、その後訪れる絶望はより深く、より色濃くなる。

その絶望がコンセクレイションリングの発動をさらに早めるのだよ。

君たちは、私の樂園のために絶望を育てる薪に過ぎない。」



「…そんなこと、俺が絶対に認めさせるかよ…!」

勇太は立ち上がろうとするが、過呼吸と過度の精神的負荷により、その身体は思うように動かない。ポロボロのD-3が、主の絶望に同調するように、ひび割れから鈍い光を漏らす。

周囲の炎はさらに勢いを増し、第1礼拝堂の太い梁が激しい音を立てて崩れ落ちてくる。「君は確か、すみれちゃんが言っていた…勇太ちゃんだね？」

ふふ落ち着きな、君の代わりと言ってはなんだけど一発ブチ込んであげるから。」
「?」

次の瞬間、教団施設の背後の厚い大理石の壁が、凄まじい爆音と共に外側から吹き飛ばされた。

硝煙の向こうから姿を現したのは、岩家製造株式会社の工場長と、彼に率いられた数人の工場員たちだった。

「よう秋子!勇太!助けにきたぜ!」

「ワン!!!」

「デジマルとアヌビスモンに連れて来てもらったんだ。」

クク…彼ら中々面白いね。」

(じゅ…じゅとうほう?違反じゃない!)

彼らが肩に担いだ違法調達为重バズーカ砲が、同時に火を噴く。放たれた徹甲弾頭がムゲンドラモンの足元で炸裂し、凄まじい土煙と爆炎が、礼拝堂のすべてを覆い隠した。

「舐めんな!」

倒れた体勢から発射しようとするムゲンドラモンの目の前でフラッシュバンが破裂し、光が満ちる。

ムゲンキャノンの掃射は上空へと消えていった。

それは、安所が連れた自衛隊の部隊であった。

「やあ、烏藤警部補…それに。」

安所がセラフィモンを睨みつける。

そこには、敵対を越えた執着にも似た憎悪が込められていた。

「サポートをお願いしてたんだよ…彼女に逃げ道の確保をしてもらってる。」

さあ、今のうちよだよ行くわよ!」

視界が完全に遮られた刹那の空白を突き、すみれたちは勇太と、保護した家族たちの身体を抱え、崩落する

TEZ 本部からの脱出を果たした。

背後、猛り狂う激しい炎の中で、セラフィモンの「人間としての皮」が、内側からの膨大なエネルギーによって

限界を迎えたようにメリメリと引き裂かれていく。

炎に照らし出されたそのデジモンとしての真の貌には、今まで見せていた穏やかさや神々しさなど微塵もない、底知れぬ邪悪さと狂気に満ちた、本物の悪魔の笑みが生々しく刻まれていた。